

子育て学習の構造的理解と支援

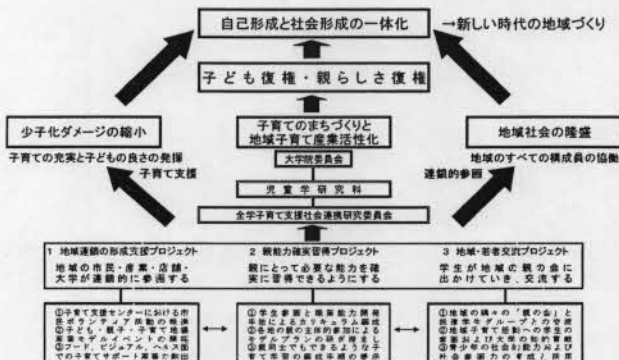
西村 美東士（聖徳大学）

1 「子育てのまちづくり」という総合的観点からの学習支援

聖徳大学では、本年度から文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業「社会連携研究推進事業」補助金を受け、「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」を開始している。われわれは、本研究をとおして、子育て学習の構造を明らかにし、また、親の参画による「子育てのまちづくり」を実現し、その支援理念に関する知見を得たいと考えている。予算は2億7560万円である。

本研究により、学生、教員、市民、親子、関連産業、自治体のすべての連鎖的で主体的な参画を実現し、わが国の子育て支援、次世代育成と、子育てを中心とした地域振興の質的向上に資することによって、ひいては日本の子どもたちがすこやかに成長できるような地域環境づくりのために貢献したい。

子育て学習支援についても、下記の本研究概念図のような総合的観点から取り組む必要があると考える。



2 職業能力開発手法の活用による子育て学習の構造化

われわれが2004年度後期の社会教育主事課程授業の機会を得て進めた研究では、職業能力分析「クドバス」(CUDBAS=Curriculum Development Method Based on Ability Structure)の手法を採用することにより、高校生の子をもつ親に求められる能力を分解してとらえた上でこれを構造化し、各科目の到達目標及び全体の「仕上がり像」が明示化された学習内容を編成して、学習プログラムを作成した。その成果の吟味により、学習内容編成において能力分析から積み上げていくことの妥当性が明らかになった。上記「親能力確実習得プロジェクト」では、その妥当性を現実社会や親の内的世界との実践的関与のなかで検証していく。

3 討論—子育て学習支援の課題

以上から、本発表では、以下の3点について討論を提起したい。

- ①社教主事の机上ではなく、親同士のWSにより、能力構造化に基づく到達目標明確なプログラム作成。
- ②「わが子の悩みだけであとは人任せ」の親ではなく、「子育てのまちづくり」の総合的観点をもつ親教育。
- ③親能力の習得だけで完結する親教育ではなく、他者の子育て支援、商品開発等の地域実践との往復運動を。

子育て学習の構造的理解と支援

～「子育てのまちづくり」検討のための仮説の設定～

西村美東士（聖徳大学「子育て支援社会連携研究」事務局長）

<http://mito.v¹⁵s1.jp>

はじめに ～「子育てのまちづくり」という総合的観点からの学習支援を～

本学では、本年度から文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業「社会連携研究推進事業」補助金を受け、「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」を開始している。われわれは、本研究をとおして、子育て学習の構造を明らかにし、また、親の参画による「子育てのまちづくり」を実現し、その支援理念に関する知見を得たいと考えている。予算は2億7560万円である。

本研究により、学生、教員、市民、親子、関連産業、自治体のすべての連鎖的で主体的な参画を実現し、わが国の子育て支援、次世代育成と、子育てを中心とした地域振興の質的向上に資することによって、ひいては日本子どもたちがすこやかに成長できるような地域環境づくりのために貢献したい。

1 子育て学習の構造

1-1 子育て学習の構造的理解の必要性

われわれは、子育て学習支援の実践のなかで、たとえば「わたしは運動会の大きころがしのだるま」（家庭では偉そうにしているけど、中身は何にもない）などの母親たちの実存的表現に感心し、当初はそれを交流し、まとめるだけの学習支援に埋没しがちであった。しかし、後述する実践研究のなかで、次のように考えた。

このようなサロン型学習に終始しては、問題解決に向けたワークショップ型学習への発展にはつながりにくい。より効果的な支援方策を検討すべきである。子育て学習支援者は、これらの気づきをより構造的に理解し、サロン型学習がより気づきを深めるワークショップ型学習に発展、深化するよう、効果的な指導行為を介在させる必要がある。

そこで、1-2では親の気づき過程について、1-3では親能力の構造的把握の方法について検討し、その支援のための研究仮説を設定したい。

1-2 社会的／個別的気づきと、その過程を把握した意図的支援による効果

本研究¹⁾は、2000年度徳島大学大学開放実践センター公開講座「子育ての中の交流・コミュニケーション」を対象とした。分析は、①個人による文章表現ワークの成果、②ワークショップの成果、③各回終了時の個人による振り返りの文章を対象にして行なった。他に、④受講者1名に対する面接調査を行った。

研究結果を分析し、図1の結果を得ることができた。社会的／個別的については個人によっては固定化傾向を破れないケースが見出された。しかし、客体としての気づきと主体としての気づきについては、往復しながら主体としての気づきを深めていく過程が明らかになった。

さらに、気づき支援の分析をとおして、次の「往復」の効果が認められたと考える。

第1に、気づきの過程において、「悩んでいるのは私だけではない」、「皆が同じ思いをもっている」という社会的な気づきが、個人の安心や集団による共同解決につながっていった。反面、「結局は自分の生き方につ

1) 西村美東士「親子関係における気づき過程とその支援—公開講座による子育て支援の実践」、徳島大学大学開放実践センター紀要第12巻、2003年7月、pp.71-95

いて考えること」、「みんなと一緒にとか、普通って、どんなことなのか」という個別的な気づきが、社会的な気づきと往復して深まっていった。

		1	2	3	4	5	6			1	2	3	4	5	6
A	社会的							客体							
	個別的							主体							
B	社会的							客体							
	個別的							主体							
C	社会的							客体							
	個別的							主体							
D	社会的							客体							
	個別的							主体							
E	社会的							客体							
	個別的							主体							

図1 各人の各回振り返りの文章表現に表れた気づき過程（数字は回目）

第2に、気づきの過程において、講師や他の学習者から影響を受ける客体としての気づきと、影響を与えている主体としての気づきが往復していた。講師からの知識提供では、紹介された本を読もうと思ったり、学習者間の相互関与では、「私の話を皆が聞いてくれた」、「相手が話してくれた」ということから自己内対話を深めたりする過程が見られた。

第3に、気づき支援において、講師によって意図的に構成された学習機会のなかで、学習者主体の偶発的な交流が行われた。そして、その成果に基づいて、次の学習機会がより意図的、効果的に構成された。

第4に、気づき支援において、講義やワークショップ等をととして子育ての知識・態度に関する概念の提供が行われるとともに、他者の異なる受け止め方を紹介することによって、その概念の「打破」が試みられた。そのために、「自分のためのショッピング」という合意に対して、翌週には「それが私にはストレスになる」という発言を取り上げるなどの指導行為が行われた。

これを図2に示した。上下は学習者の気づきの諸側面、左右は支援の諸側面を表している。



図2 気づき過程とその支援の往復

本研究をととして、安心感と緊張感、他者への気づきと自己への気づき、学習集団内の共通性と一人一人の個性、個人の悩みの共同解決と自己解決等の往復が見られた。これらのペアを二項対立的にとらえるならば、どの気づきにはどの支援が効果的かという発想がなされよう。しかし、実際には、本研究では、現実の気づき過程は上下を往復しながら深まることが明らかになった。これに伴って、効果的な支援方策のためには、個人や集団の気づき過程を把握して、必要に応じて左右の二項を往復させ、気づき過程と交差させることが適切と考えたい。

親が、子育てに関する自他の差異や、世間でいわれる「理想の子育て」と自己の子育てとのギャップに気づいて自己否定に陥った場合、対自、対他の気づきを経るよりも、直接的に問題解決の答やストーリーを求めようとすると考えられる。これに対して、本講座で行われたような「他の親との相互受容のなかでの悩みの交流」は、他者や自己への気づきを循環、深化させ、その過程のなかから自らの答を見出すための一定の効果をもつことが明らかになったといえよう。

本研究では、学習集団に受容的雰囲気形成され、互いに安心して自己開示を交換することによって、対自・対他の気づきが促されるという仮説は、部分的には検証された。また、講師がいくつかのワークショップの手法を活用することにより、同じ悩みを抱えた学習者のなかでは、受容的雰囲気は比較的容易に形成されることがわかった。

しかし、本研究では同時に、「わかる」とか「同じ」などの受容をしあうことによって、逆に対自や対家族、対社会への気づきを阻害してしまう傾向を見出した。そこで、今後は、次の仮説を設定して、研究を進めたい。

【子育て学習において真に「自分なりの答を見つけた」と実感するためには、他者の子育てとの差異に関する個人の気づきを明確化し、学習集団のなかで組織化することによって、学習者の自己受容をより深いものにするのが重要である。】

1-3 職業能力開発手法を援用した親能力の構造的把握の方法

われわれが2004年度後期の社会教育主事課程授業の機会を得て進めた研究では、職業能力分析「クドバス」(CUDBAS=CURriculum Development Method Based on Ability Structure)の手法を援用することにより、高校生の子をもつ親に求められる能力を分解してとらえた上でこれを構造化し(図3)、各科目の到達目標及び全体の「仕上がり像」が明示化された学習内容を編成して、学習プログラムを作成した。本研究では、次の仮説の妥当性を検討した。

【高校生の子をもつ親の子育て能力を、「～を知っている」(知識)、「～ができる」(技能)、「～の態度がとれる」(態度)の3種類の表現のいずれかで表記して、これを構造化することにより、明確な到達目標をもった効果的な学習プログラムを編成することができる。】

その結果は、次のとおりである。

本研究では、子育て能力を分解して、知識、技能、態度の3側面から表記し、これを構造化して、そのまま学習プログラムに反映させたのであるから、仮説で設定したように学習目標が明確化するのは当然の結果であったといえる。実際にも、学習スケジュール作成の段階にあっては、比較的容易に、テーマごとの学習目標を設定することができた。また、そこで設定された学習目標は、各回の担当者及び講師にも明確に認識されるし、他の回とは重複しないため、支援が責任をもって目的的に行われるという実践面での大きなメリットが期待できる。本研究で得られたこのような知見は、子育て学習の内容編成作業の組織化や学習機会提供事業の到達目標の設定の意義とあり方を示すものとしても有効であるといえよう。

しかし、本研究結果では明らかにできなかった課題が残されていると考える。

第1に、講座で得た知識、技能、態度を、実際の子育てに生かすためには、親の「自信」が必要になると考えられる。しかも、その自信は、学習者間の相互受容のなかで個人が埋没してしまうかたちではなく、自己や家族に対して、個人として自覚的に向き合うかたちで形成されなければならない。大学授業においては学生

表1 必要能力・資質構造図

仕事	能力-1	能力-2	能力-3	能力-4	能力-5
1 前向きな態度を示す	1-1 A 人生に対して前向きな態度がとれる	1-2 A 人権を尊重する態度がとれる	1-3 A 自分が間違っていたら子に謝ることができる (BBS)	1-4 B 親自身がうまくいかないうとき、ヒステリックでない態度がとれる	1-5 B 家族旅行をしたとき楽しい態度がとれる
2 子の変化を待つ	2-1 A ほっとしておくことができる	2-2 A 子のプライバシーを尊重する態度がとれる	2-3 A 知っていても知らない態度がとれる	2-4 A 子を信頼することができる	2-5 B 子にとっては家がわずらわしいことを知っている
3 子の実態を理解する	3-1 A 子の今の精神状態を知っている	3-2 A 青年期は不安定な気持ちであることを知っている	3-3 A 青年期の心理的特徴を知っている	3-4 B すぐに反抗してくることを知っている	3-5 B 子の生活態度を知っている
	3-6 B 親にうそをつくことを知っている	3-7 B 子の友人関係を知っている	3-8 B 彼(彼女)がいるのを知っている	3-9 B 望ましい勉強方法を知っている	
4 子と意識的に関わる	4-1 A 子からの相談や話し合いに応ずることができる	4-2 A 何に關心があるかを知っている	4-3 A じっくり話を聞くことができる	4-4 A わが子に注意ができる	4-5 A 子が悪いことをしたとき毅然とした態度がとれる
	4-6 B 子がパニックにおちいっているとき冷静な態度がとれる	4-7 B 子が落ち込んでいるとき上手に励ますことができる	4-8 B 家では食事を一緒にするよう誘うことができる	4-9 B わが子にあいさつができる	4-10 B 高校生に適した性教育ができる
	4-11 B 子からの連絡相談に応じることができる	4-12 B 現代社会の就職状況や仕事の内容について知っている	4-13 B 部活のおかけができる		
5 他の関係者と連携する	5-1 A 学校の様子を知っている	5-2 B 同じ高校生の子を持つ親と情報交換や相談をすることができる	5-3 B 学校側と緊密かつ自立的な連携ができる		
6 家庭を安らぎの場にする	6-1 A 家族との会話がでる	6-2 B 他愛ないおしゃべりができる	6-3 B 励ます時、子が何を食いたいかわ知っている		
7 子と相互に生活を支え合う	7-1 A お願いの態度がとれる	7-2 A そうじ、片づけを子にさせることができる	7-3 A 食事の仕度、洗たく、そうじができる	7-4 B 高校生に必要な栄養素について知っている	7-5 B 子にとっての必需品を買うことができる (買い物)
注1 能力の種別は右のとおりである 注2 能力の重要度は右のとおりである					
知識 技能・態度					
A: 非常に重要で、詳細に知っているか、よくできる必要がある B: 普通であって、一般的に知っているか、普通にできればよい C: あまり重要でなく、概略を知っているか、体験していればよい					

に対して揺さぶりをかけ、一時的には「自信を失わせ」、その学生のより高度な学問の修得を図ることもあるだろう。しかし、自己の子育てのなかでの問題解決のために受講している学習者に対しては、成人教育の性格上、本人のニーズに応えることを最優先に扱うべきと考える。クドバスでは、すでに述べたとおり、人格的な

表2 学習目標別受講者評価票（縮小版）

「高校生の子を持つ親のための講座」受講者評価票											
まず、あなたのことについておたずねします。あてはまるところに○をつけてください。									性別	女	男
職業経験	なし	3年まで	10年まで	20年まで	20年以上	現在	パート	バイト	常勤	無職	
欠席された回数		0回	3回まで	6回まで	9回まで	12回まで	13回以上				
つぎに、下記のうち、もっともあてはまる数字に○をつけてください。											
受講いただきありがとうございます。今後、より効果的な講座を開くため、受講前と受講後のそれぞれの学習目標についての自信の有無をお答えください。ただし、 <u>どちらかといえば自信がない場合は「①」に、どちらかといえば自信がある場合は「③」に○をつけてください。どちらともいえない場合だけ「②」に、○をつけてください。</u>						1 受講前の状態		2 受講後の状態			
						自信がない	わからない	自信がある	自信がない	わからない	自信がある
01	人生に対して前向きな態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
02	人権を尊重する態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
03	自分が間違っていたら子に謝ることができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
04	親自身がうまくいかないとき、ヒステリックでない態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
05	家族旅行をしたとき楽しい態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
06	ほっとしておくことができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
07	子のプライバシーを尊重する態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
08	知っていても知らない態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
09	子を信頼することができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
10	子にとっては家がわずらわしいことを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
11	子の今の精神状態を知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
12	青年期は不安定な気持ちであることを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
13	青年期の心理的特徴を知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
14	すぐに反抗してくることを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
15	子の生活態度を知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
16	親にうそをつくことを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
17	子の友人関係を知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
18	彼（彼女）がいるのを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
19	望ましい勉強方法を知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
20	子からの相談や話し合いに応ずることができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
21	何に関心があるかを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
22	じっくり話を聞くことができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
23	わが子に注意ができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
24	子が悪いことをしたとき、き然とした態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
25	子がパニックにおちいっているとき冷静な態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
26	子が落ち込んでいるとき上手に励ますことができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
27	家では食事を一緒にするよう誘うことができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
28	わが子にあいさつができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
29	高校生に適した性教育ができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
30	子からの進路相談に応じることができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
31	現代社会の就職状況や仕事の内容について知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
32	部活のおかけができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
33	学校の様子を知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
34	同じ高校生の子を持つ親と情報交換や相談をすることができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
35	学校側と緊密かつ自立的な連携ができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
36	家族との会話ができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
37	他愛ないおしゃべりができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
38	励ます時、子が何を食べたいかを知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
39	お願いの態度がとれる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
40	そうじ、片づけを子にさせることができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
41	食事の仕度、洗たく、そうじができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
42	高校生に必要な栄養素について知っている	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	
43	子にとっての必需品を買うことができる	1-	2	-3	1-	2	-3	1-	2	-3	

ものや性格などは能力カードからは除かれる。しかし、人格や性格がどうであろうと、子育て実践のためには、望ましいかたちでの自信の獲得が必要といえよう。

そこで、その到達度を確かめるため、表1に示したような評価票を試作した。この評価票により、それぞれの学習目標に関して、そこで得られた能力を実践に結びつけられるかどうか、逐一的にその達成度と変容効果が測定できると考えた。なお、これができるのも、クドパスによって子育て能力を分解して書き出す作業があったからこそのものでとらえることができよう。

第2に、気づきの過程がつねに循環するものだとすれば、これらの気づきを統合的に処理するためのメタレベルでの能力が必要になると考えられる。クドパスでは、能力を分解してカードに書き出し、それを必ず一つの仕事だけに帰属させるため、ある仕事に対して必要な能力と、関連して活用すべき他の能力が、離ればなれになる危険性がある。もちろん、科目編成において、異なる仕事から横断的に能力を組み合わせたことは、そのような問題点を少しでも解消する意義があったと考える。しかし、到達目標を他の仕事や科目と重複させないというクドパスの原則は、先述のメリットとともに、このような問題点をはらむのである。

これについては「統合的能力の育成」として、次のような新たな学習プログラムを考えたい。それは自分の持っている数種類の能力をフル動員させて「指令」を遂行するというプログラムである。そのプログラムは、当然、参加型、体験型になるだろうから、元の講座担当者が推進するほか、受講修了者の自主グループを組織して、そこが自主的、実践的に推進することも効果的と考える。

以上に述べたことを仮説として設定し、今後、検討を進めたい。

2 「連鎖的参画による子育てのまちづくり」の構造とその支援（未完）

2-1 地域連鎖の形成支援プロジェクト

連鎖・連携方式による地域の子育て産業支援・子育て活動展開プログラムの構築

～産官学民協働による子育て支援に関する実践的研究

研究仮説は次のとおりである。

「地域子育て支援と子ども・子育て産業との相互乗り入れ→子ども・親子向け産学民商品共同開発→子どもの生活習慣定着化→地域活動・経営活動双方の促進とネットワーク化→子育てに即反映→消費者全体の利益→経済的利益→『人に役立つ経営理念』構築→子育てのまちづくりの実現」というサイクルを、子育て支援センターのプロデュースのもとに、目に見えるかたちで実現することにより、子ども・親・市民・関連産業・まちが連鎖的に成長する。

そのため、次の3事業を実施する。

- ①子育て支援センターにおける市民ボランティア活動の推進
- ②子ども・親子・子育て地場産業モデルイベントの開拓
- ③フード、ビジュアル、ヘルス面での子育てサポート産業創出

他にない本研究の特色は次の3点である。

- ①子育て支援センターへの市民参画。
- ②子ども・子育て産業と公的支援機関・大学との交流・連携。
- ③子ども・親・市民・関連産業・自治体行政の一斉同時連鎖方式による目に見えるかたちでの子育てのまちづくり。

2-2 親能力確実習得プロジェクト

親の役割発揮に必要な能力を確実に習得できる成人教育プロセスの確立

～達成目標が明確に示された子育て学習の内容・方法に関する研究開発

研究仮説は次のとおりである。

職業能力開発の手法と能動的学習方法を活用することによって、親教育プログラムは「達成目標の明示→教育側との学習契約成立→自己決定による受講→終了後の達成度自己評価→学習者による教育評価→相互関与による契約見直し→学習者参画型親教育の実現」という好循環を実現できる。

そのため、次のように研究を進める。

- ①学生参画と職業能力開発手法によるカリキュラム編成
- ②各地の親の主体的参加によるモデルプランの検討・改善
- ③親同士でもできるような子育て学習の編成手順の提示

他にない本研究の特色は次の5点である。

- ①親教育プログラムへの職業能力開発手法の導入。
- ②親の「仕上がり像」が明確なカリキュラム編成。
- ③親教育における達成度評価の実施。
- ④学習者参加型親教育の開発。
- ⑤学習者側でもできるカリキュラム編成手順の確立。

2-3 地域・若者交流プロジェクト

院生・学生と親との交流を基礎にした地域子育て活動の活性化

～院生・学生が参加・参画する地域子育てプログラムの研究開発

研究仮説は次のとおりである。

院生・学生を地域の単位親の会等に派遣し、当該院生・学生に適宜適切な指導を与えることによって、自治体等ではなしない地域子育て活動への若いセンスの導入と、大学から市民への直接的支援を行うことができる。その成果は、他プロジェクトとも連動して地域活性化に資するものとなる。さらに、この取組によって、院生・学生の社会参画力を向上することができ、ひいては彼らに対して、今後の職業生活、地域生活における社会的リーダー養成という高等教育の役割を果たすことができる。

そのため、次のように研究を進める。

- ①地域の隔々の「親の会」と派遣学生グループとの交流
- ②地域子育て活動への学生の参画および大学の知的貢献
- ③青少年の社会的能力および社会参画力の育成と活用

他にない本研究の特色は次の4点である。

- ①院生・学生と単位親の会等との交流をととした地域のすみずみでの交流。
- ②院生・学生の参加・参画による「地域子育て学」研究と地域子育て活動プログラムの開発。
- ③単位以外の地域活動資格の学生への付与と一般市民への公開。
- ④院生・学生の社会参画力の育成と結びついた大学教育・研究活動の展開。

2-4 子ども支援者の養成

われわれは、現在、授業内において学生に次のような「研究活動」を行わせている。

- ① 親の子育て調査
- ② 親の会調査
- ③ 自由課題研究

(1) ネットコミュニケーション研究 (2) 三世帯家族代替方策研究 (3) 親の相談したい内容と対応方法研究 (4) 安全冒険公園づくり研究 (5) 親子交換日記の意義と方法研究 (6) 公民館・児童館子育て支援研究 (7) 親子参加イベント・施設研究 (8) 親子カフェ開発経営計画研究 (9) あいさつ促進指導法研究 (10) 子どもの自己決定権拡張研究 (11) 子どもが愛しくなる方法研究 (12) 親と子どもの居場所づくり研究 (13) 地域親密化への手この手研究 (14) 母親たちによる起業計画研究 (15) 父親の子育て参加支援研究 (16) 父親の地域活動開発研究 (17) 親子参加レクリエーション研究 (18) 子どもを取り巻く環境網羅的把握研究 (19) 親子のコミュニケーション研究 (20) 親子自然体験研究 (21) 指導者と保護者間の連絡ノート研究 (22) 母と娘のいい関係研究 (23) 親離れ、子離れ研究 (24)

親子関係にもたらすベットの意義研究 (25) しつけの悩みと解決方法研究 (26) 子どもの病院研究 (27) 親の権利保護と子どもの成長の両立に関する研究 (28) 親子・子育て支援商品開発研究 (29) 田舎と地域の子育て環境比較研究

このことにより、次のような子ども支援者を養成したい。

- ① 親の気持ちに寄り添い、喜びや苦しみを理解し、親に真正面から対面して、適切な指導助言および親教育ができる。
- ② 担当する子どもに対して、担当する時間だけしか考えられない支援者ではなく、家庭、地域にまで視野を広げて考えることができる。
- ③ 「子育てのまちづくり」に対して自ら参画するだけでなく、参画の意義をよく理解して、子どもや親たちの参画を上手に促すことができる。

【資料】 社会連携研究事業（子育て支援センター）共同研究のお誘い

2005/09/29 事務局長 西村美東士 (mitoshi@seitoku.ac.jp)

プロジェクト名：連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究

実践研究拠点：聖徳大学子育て支援社会連携研究センター

研究期間：平成17年度から21年度までの5年間

予算規模：2億7560万円

研究理念

学生、教員、市民、親子、関連産業、自治体のすべての連鎖的で主体的な参画を実現し、わが国の子育て支援、次世代育成、子育てを中心とした地域振興の質的向上に資することによって、ひいては日本の子どもたちがすこやかに成長できるような地域環境づくりのために貢献する。

概念図

